

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第356回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

不動産学部で4年近く不動産学を学んでいるが、実学である不動産学の学修の多くは、実務をキャッチアップすることに重点がある。不動産の実務や制度の背後にある、あるいは、あるべき哲学は、教員が話のついでに時折触れるにとどまる。本多信博さんの『住まい悠久』は、最初から最後まで不動産の哲学が述べられており、刺激に満ちたものだった。

特別企画 『住まい悠久』を読んで

世の中を幸福にする基軸

が優先する。このような行動は、偏見を助長するだけでなく、様々な分野の発展を妨げる要因にもなり得ることを、本書を読んで痛感し、改める必要を感じた。

住居は人間の基盤だが、多くの賃貸アパートや分譲マンションなどは、採算を第一に考えて供給され、住む人の生活はその範囲内での配慮

う。本書に、日本の老いに対する価値観等についての記述があるが、日本人の美徳ともいわれる「気遣いの精神」、別の表現をすれば、周囲の顔色をうかがう風潮が価値観に影響している、と日頃から感じている。人のため、と、人の目を気にするは似て非なるものだ。人のためを実践するには人の目を気にしてはいけないことも多いが、往々にして、後者

にとどまる。これまで私はそれを当然のこと」と考えてきた。しかし、コロナ禍で半年以上の自粛生活をしたこと、住居というもののあり方をひびく勘違いしていたと感じるようになった。経済活動の持続可能性を考えれば採算は必要だが、それ以上に、不動産業に従事する社会人となることを目前に控えた若者に本当に必要なものは、本書が示す「住まいは暮らしを楽しむ場であればならない」という信念と、人生を大きく左右する選択のお手伝いをさせていただけるとは非常に尊いという自覚であると気付かされた。

強い言い方をしてみれば、日本の働き方や業界の活動の多くは、前例に沿った雇用形態や昇進方式、広告や販売が多い。それらに対して、伝統を受け継いでいるというより、安全策に捉われ、様々な開拓を怠っていると感じることは多々ある。冒頭に述べた日本特有の風潮ともいえ、今まで亀の歩みだった「働き方改革」はコロナの流行を契機に大きく前進するように思える。働き方が変われば暮らし方も変わる。ワークライフバランスを再確認し、より住みよい住居と住みよい社会へ変革を遂げる機会と感じる。世の中を変えるには偏見や従来の考え方に捉われず、未来を真摯に考える多くの若者が不可欠である。『住まい悠久』は、そんな「これから」を生きる学生や社会人にこそ読んでいただきたい。

【教員のコメント】
暮らしを楽しむ住まいは時間と空間の両立で実現する。空間は技術的側面が多く、事業者が関与しうる一方、時間は住まい手が生み出すもので、働き方や哲学と関係する。ワークライフバランスに敏感な若者の時間意識の高まりが両立を誘導する。



藤澤 美月
不動産学部4年